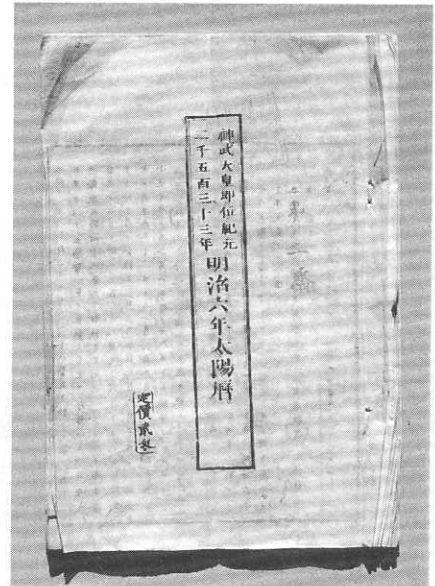
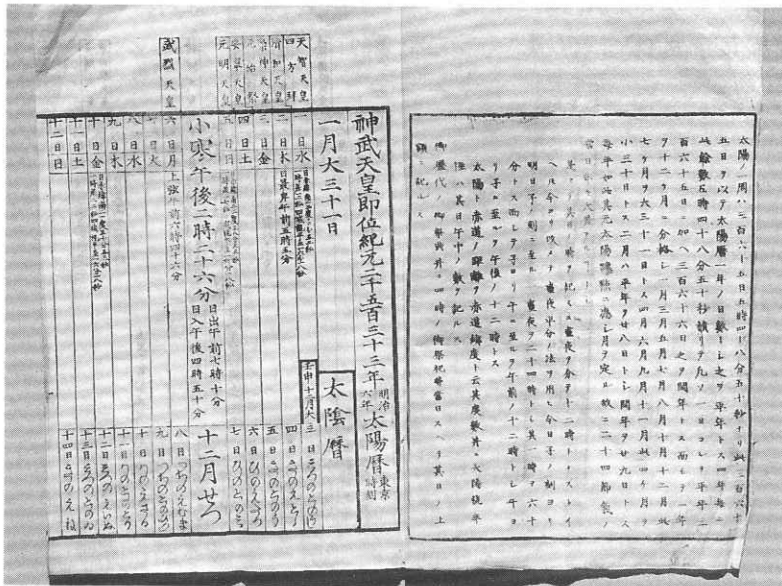


# 郷土館だより

Vol. 19. No.2

1996. 12. 15



## 太陽暦第一号の明治六年暦

いま私たちが日常使用しているカレンダーが、初めて日本に登場したのは今から123年前の1873年(明治6年)のことでした。太陽暦への改暦です。この明治政府の大仕事は、かなり突然の決定、断行でしたから、民衆にとってはそれこそ青天の霹靂の一大事件で、戸惑いも大きかったといえます。それまで、長い間、わが国が採用していた暦は、後に旧暦と呼ばれるようになった太陰太陽暦でしたから、新暦採用で困ったことは、月の日数が変わったこと、びっしりと書き込まれていた日々の吉凶を占う暦注が消えてしまったことでした。「暦を見なければ夜も日も明けない」と言われるほど暦に頼って生活していた日本人でしたから、改暦はほんとうに深刻な影響を与えたようです。

明治政府の強硬な改暦には次のような裏事情があったからだと言われます。

世の中は江戸の鎖国時代が明けて欧米列強国の文化が怒濤のように流れ込んでいる時でした。彼らとの外交の中で困ったことの一つに暦の日付の相違がありました。こちらは陰

暦だし、方や相手は太陽暦だから、交渉ごとの都度、両方の暦を見比べなければならないという不便が生じたのです。外国の暦、つまり太陽暦に合わせる。これが改暦の第一の目的でした。次に、裏事情として明治新政府の財政上の問題がありました。実は誕生したばかりの政府ですから、安定した状態とは言えず、きわめて逼迫した財政状況にありました。したがって少しでも儉約できるなら儉約したいと願っていた折りも折りでしたから、提案された改暦には一も二もなく飛びついたのでした。そして、改暦が施行出来るギリギリの期限12月3日に、是が非でも間に合わせる必要がありました。明治5年12月2日を以て太陰暦を中止し、翌3日を明治6年1月1日とするということに。

それがなぜ儉約か。改暦は新政府の役人の給料都合2ヵ月分のカットと同じ効果がありました。つまり、明治5年12月分の1ヵ月分と、旧暦だった場合、翌6年に有るはずだった閏月1ヵ月分の給料を払わなくて済んだからでした。

# 郷土館縄文土器作り教室・夏の郷土学習

## 小学生の体験学習の報告

郷土館では、長い夏休みを有意義なものにするため、小学生を対象とした体験学習を今年も実施しました。そのうちのいくつかを紹介しましょう。

### ■縄文土器作り教室

毎年夏休み恒例の郷土館行事です。

この教室は、大変人気があり、例年小学4～6年生の3学年で募集すると、30人の定員に約2倍の申し込み者があり、どうしても抽選で参加者を決めると6年生の希望者が落選してしまうので、昨年からは、募集要項を変え、参加できる学年を小学5～6年生のみとし、人員も35人として5人増やして募集しました。

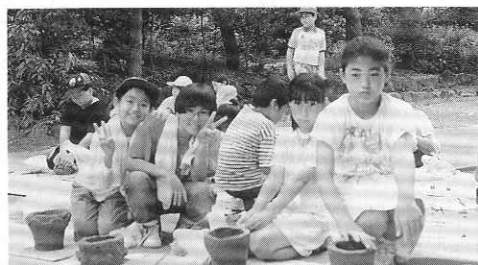
平成8年7月24日(水) 9時30分～12時30分  
「土練り」…粘土(テラコッタ2kg)、赤土(1kg)、砂(800g)、水(約400cc)をよく混ぜて、約2時間練りあげた。

7月26日(金) 9時30分～16時30分  
「成形」…まずこれから作成する縄文土器のイメージ画を書く。いよいよ実際に「輪積み法」といわれる製作技術で、丸い底部の上にひも状粘土を円形に積み上げて密着させて土器の形を作っていく。最後に荒縄や竹べら、貝がらなどで装飾文様を付け加えて完成させた。

8月22日(木) 9時30分～16時30分  
「焼成」…楽寿園“白鳥の池”東側広場で、コンクリートブロックを用いて、縦3m、横2m位の炉を作り、大量のマキを燃やして一度カラ焚きし、下火になったら、火の高温に徐々に慣らした土器をオキの中に入れ置き、再度モシ木をくべて、約1時間30分野焼きした。火が灰の状態になり十分焼かれた土器が赤銅色になった後、縄文土器を取り出した。子どもたちも自分の完成した土器を満足そうにながめ、早く熱がさめないかと待ち遠しそうでした。無事にでき上がった土器がほとんどでしたが、2人だけ、残念ながら底部が抜けたり、かけてしまいました。

市内小学校5～6年生 34人

(応募者 36人：2人欠席)



### ■夏の郷土学習

「遺跡見学・箱根旧街道を歩く」

日程 平成8年8月7日(水)

午前8時50分～午後4時00分

講師 三島市立北小学校教諭 杉浦幸男氏

参加者 三島市内各小学校4～6年生 27人  
(申込者 28人；欠席1人)

現在発掘調査を実施している市内の遺跡を見学して、古代の人々の生活を想像しました。又、昔の旅人は、箱根八里を越すのに大変な苦勞をしたことに思いを馳せながら、三島市側に残る箱根旧街道を歩き、あちこちに残る史跡を訪ね、郷土の歴史や伝説に触れました。

市内の遺跡を見学した後、箱根旧街道を接待茶屋から下り、東海道の史跡を訪ね歩く野外学習に子どもたちも大変楽しそうでした。

途中にある一里塚や史跡・石だたみなどの歴史的な事を学習し、杉浦先生が作ってくれた問題集つきテキストの答えをさがしながら、お話を聞いたり、カブト岩や道祖神の絵を描いたり、芭蕉の気分で一句詠んだりと変化に富む勉強の旅で、昔のメインロードと昔の旅人の苦勞を感じ、ふるさと三島への理解を深めました。

こわめし坂を歩いて疲れたことを思い出に、今年の夏の郷土学習も無事終了しました。



## 「郷土教室」

学校休業日（第二土曜）に実施する小学生（4～6年生）を対象とした体験学習の教室です。2学期に開催した教室のうち、2回分—第3回目と4回目を紹介します。

### 第3回「紙飛行機を飛ばそう」

10月12日(土)

講師 竹細工等玩具研究家 瀬川 到さん  
参加者 三島市内小学校4～6年生 21人  
(応募者 23人；2人欠席)

講師が用意したケント紙型紙に描かれている紙飛行機の部分翼をハサミで切り抜き、順序よく作成していった。竹割りばしに重心やバランスを計算した長さの所に印をつけて、主翼・方向だ・尾翼などをノリ付けする目安にした。午前中に一応紙飛行機を完成させ、昼食休憩後、外（郷土館東側空地）で飛ばしてみた。初めは、キリもみ回転したり、ストーンと落ちてしまったが、バランス・重心を根気よく修正しながら滞空時間がのびてきれいに回りながら飛べるようになるまで手直した。その結果全員20～30m（約7～8秒間）飛ぶ位になり、子供たちも大喜びであった。

最後に、先生の見本の紙飛行機をくじ引きで当選者にプレゼントされ、終了した。



### 第4回「古代の生活を体験」

～縄文クッキーを作ろうよ～

11月9日(土)

講師 市埋蔵文化財調査整理室 池谷初恵さん  
参加者 三島市内小学校4～6年生 26人  
(応募者 28人；2人欠席)

講師から小学校で学習する歴史のレベルに合わせて、「縄文時代」とは今から何年位前かなど質問しながら子供達に歴史・考古のおもしろさを話してくれた。

縄文人の食生活の様子なども子供達の考え・意見を引き出しながら、合わせて、石器・土器についても解説し、子供達も興味深そうに聞くようになった。

いよいよ「縄文クッキー」の材料を使って調理を始めるが、4人づつ7グループに分かれ、石皿・すり石・黒よう石のナイフ・板を使って“縄文人”になりきって、クリやクルミを切ってすりつぶしていった。

粉状になるまで約45分間すりつぶし続けたものを丸めて器の中で、うずらの卵とドライイーストを加えよくかき混ぜた後、30分間そのままにしておいた。

外で火を起し鉄板を熱しておき、焼きあげる準備は完了した。

食材をクッキー状に形作り、油を敷いた鉄板で10分位焼いて縄文クッキーを作った。

子供達の中には、昼食のお弁当の“おかずの一品”にして食べていた子もいた。

味の方はいま一つだったようだが、古代の人々も季節になると食べられる木の実を焼いて食べたりしたのかなと想像しながら、自分たちの作った縄文クッキーをおみやげに帰っていった。





## 「三島の山 (ヤマ)の祭り里 (サト)の祭り」報告

今回の企画展では、三島周辺で特徴ある山の祭り「リュウソウサン (龍爪さん)」と里の祭り「オテンノウサン (お天王さん)」を取り上げ、資料とともに展示してみました。(会期、平成8年7月20日～9月16日、入館者数8,562人)

タマヨケ (鉄砲除け) ガミサンとして、日清・日露戦争から第2次世界大戦まで、お札をもらいに来る人がひきもきらなかつたリュウソウサン。今三島では、山あいの伊豆佐野・小澤・元山中の各講の人々によって細々と続けられています。(祭日、3月18日)

また水郷地帯中郷地区の夏の風物詩、オテンノウサンの祭り (7月6日) は、<sup>なかがさと</sup>祠を神輿に仕立てて練りまわるあばれ神輿で有名です。(大場・中島・梅名・安久・函南町間宮地区) 各神輿の仕立て方は江戸時代から続く集落独自のしぼり方・からげ方があり、その伝統を継ぐ人々が高齢化しています。またフンドシ姿で担ぐ人々の中に若者の姿がめっきり減ってしまいました。

いずれも次の世代への祭りの継承という問題を抱えています。こうした中での展示は、市民にとっては、ふるさとの祭り再発見の機会となり、祭りをを行う人々には、祭りを再確認する展示となったと思われます。

※今回の展示を機会に、中島地区・大場地区の神輿が新たに仕立てられ郷土館に寄贈されました。ご協力下さった関係の皆様にお礼申し上げます。



「津島天王神系図並末社附」▲



▲中島のオテンノウサンの縄かけ

祭りの当日 (7月6日) 昼より、昔青年団で活躍したOBが20人ほど集まり、伝統どおり祠をかつき棒にくくりつけ縄をからげる。中島のオテンノウサンのお札には文化8年、嘉永5年の津島神社のものが残る。



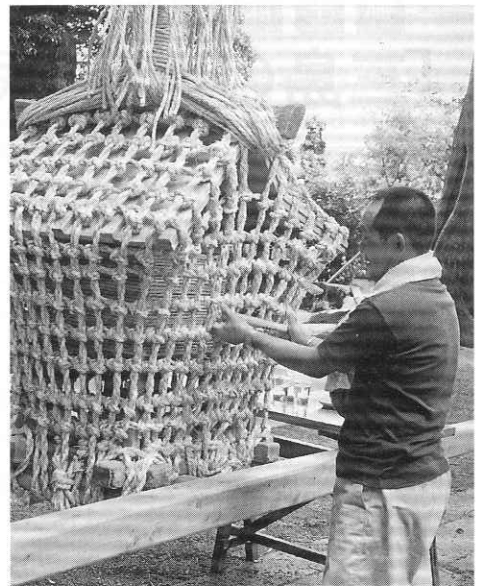
▲大場のオテンノウサンの縄かけ

7月6日8時より、大場神社境内で60～70代の男性約30人により縄ないまきつけが行われる。7本の縄をよって太くしながら神輿をしぼる。夕方神社を出発し、町内を練り回るが、麦カラ (麦藁) を燃やして景気づけられる。



▲昭和30年代の中島のオテンノウサンの祭り

かつては、集落内を練った後、梅名川の橋の上から神輿を落とし、担ぎ手たちもとび込んで、川の中で練った。川原でも麦カラが燃やされにぎやかな祭りだった。梅名・大場・間宮の各オテンノウサンも昭和30年代まで川にとび込み、勇猛さを誇っていたが、河川改修でコンクリート壁化されたため、川に入ることもなくなった。(青木利則氏蔵)



▲安久のオテンノウサンの縄切り(再現)

神輿は1晩集落内を練った後、縄を切られ、祠が取り出される。かつてはどこも刃物は使わず、全部手で縄を切ったという。現在、安久は太鼓のバチ、梅名はマキを差し込みねじり切る。中島は最初だけ手でほぐし切り、大場はハサミを用いて全員参加の「縄切りの儀」を行っている。



▲清水町下徳倉のオテンノウサンの小屋(復元)

下徳倉のオテンノウサンのお祭りは、神輿を仕立てることはしないが、麦カラ(麦藁)で屋根と側面を葺いた小屋を毎年組み立て、オテンノウサンの祠を祀っていた。現在は立派な社が建てられ、小屋作りは行われていない。

(写真提供 清水町教育委員会)



▲梅名のオテンノウサンのオコモリ

梅名のオテンノウサンは祭りの後、右内神社鳥居前の仮小屋に1週間安置される。この間每晚7時からおばあさん達と当番の女性20~30人ほどが、太鼓に合わせて天王経と祝詞をあげている。おひねり(小銭を包む)を上げる人もいる。

## 郷土館講座

## 「三島の歴史・民俗関連講演会」実施報告

郷土館では、三島市及び近隣地域の駿東郡田方郡も含めた郷土の歴史・民俗をさまざまな角度から眺め、より広く深く三島の成り立ちを理解していただけるような講演会を実施しました。

この郷土館講座（全2回）の結果報告をいたします。なお、会場は、三島市民文化会館小ホール、開演は午後2時～4時（終演）で、無料です。

- (1) 10月15日(火) 「秀吉以前の三島」  
東島 誠氏（日本学術振興会特別研究員  
（東京大学大学院生））

はじめに

## I 史料でたどる中世三島

ー政治の舞台として見た時代区分の試みー

- i 鎌倉幕府の成立と三島社
- ii 府中と呼ばれた時代



▲「秀吉・山中城を焼き尽くす」と題して講演される斎藤宏先生

iii 府中から宿町三島へ

iv 北条氏の駿河侵攻と三島

## II 三島暦と東国の世界

- i 北条早雲の伊豆討入と年号の混乱
- ii 三島暦という秩序

おわりに

\*\*\*\*\*

- (2) 10月16日(水) 「秀吉・山中城を焼き尽くす」  
斎藤 宏氏（三島市文化財保護審議委員長）

## 会場・時間

三島市民文化会館（小ホール）満席 350人

会場 13:30～

開演 14:00～

終了 16:00

## 聴講者（人数）

①10月15日(火) 108人

②10月16日(水) 125人（聴講自由・無料）

講演内容等については、講師作成のレジメに従い、詳細な解説とていねいなわかりやすい話し方で受講参加者の評価も高く、来年度以降も同様の講演会を開催するよう希望が寄せられました。

## 関白となるまでの秀吉年表

西暦	秀吉の年齢	秀吉の事績
1537	1	尾張国中村に生まれる。
1543	7	父弥右衛門が死に、光明寺にあずけられる。
1551	15	松下加兵衛に仕える。
1554	18	織田信長に仕える。清洲城の修理をして、信長の信頼を得る。
1561	25	おね(のちの北政所)と結婚。名を改め、木下藤吉郎秀吉と名のる。
1566	30	墨俣に一夜城を築く。
1567	31	稲葉山城攻めで手がらをたてる。
1570	34	越前金ヶ崎からしりぞく信長軍のしんがりを務める。
1573	37	浅井氏もっていた領地をあたえられ、12万石の大名になる。このころ、羽柴秀吉と姓をあらためる。
1574	38	長浜城を築く。
1580	44	播磨の三木城を攻め落とす。
1581	45	鳥取城を攻め落とす。
1583	47	賤ヶ岳の戦いで、柴田勝家をやぶる。大坂城をつくりはじめる。
1585	49	関白となり、翌年朝廷より豊臣の姓を受ける。



## 企画展 「発掘された箱根旧街道」

—— 石畳・山中宿・接待茶屋を中心に ——

(平成8年10月20日～平成9年2月11日)

現在開催中の企画展では箱根西坂に関する貴重な資料が展示されています。その中から数点の資料を紹介します。

## 1. 山中宿と笹屋

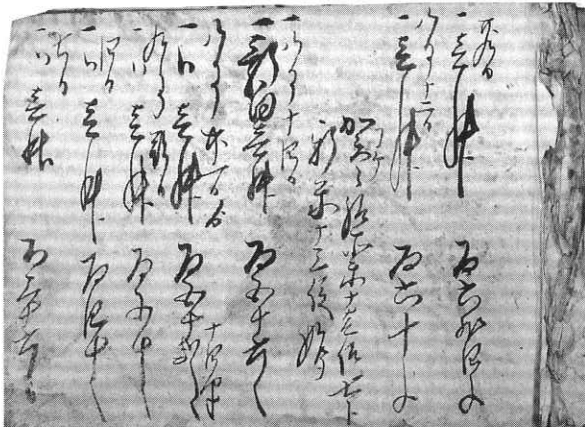
箱根西坂の標高550mに位置する山中新田は、江戸時代初期元和年間に新たに設置された集落です。江戸時代から明治中頃まで箱根八里を旅する人々の休憩所(間の宿)として、茶屋が立ち並び賑わいました。寛永年間には約300mの東海道沿いに38軒の家並が続いていました。

中でも笹屋は、多くの茶屋の中でも御小休本陣として宿の中でも格式を誇っていました。笹屋に残る「御休泊覚帳」(明和～安永年間、18世紀後半)には、多くの大名や幕府の役人の休泊の記録が残っています。この中に出された食事や代金が記され興味深いものがあります。「いも、でんがくいも、とうふ、にしめ、寒さらし団子、酒、そば、うどん」等が供されており種類が豊富でした。特に「寒さらし団子」は山中宿の名物でした。

明治に入り本陣も一般旅館と変わらない営業を求められます。明治14年に発行された「真誠講・三都講」という優良旅館案内を見ると、本陣であった三島宿樋口家や箱根宿石内家と共に山中宿笹屋と紹介されており、一流の休泊所と認められていたことがわかります。



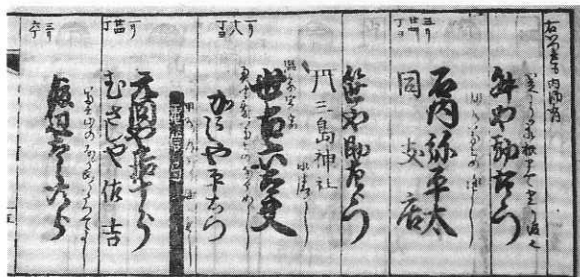
▲笹屋看板



▲笹屋「御休泊覚帳」



▲接待茶屋茶釜



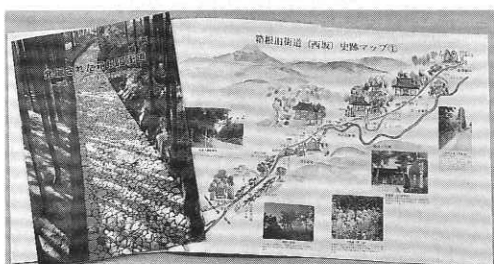
▲「真誠講・三都講」

## 2. 接待茶屋の茶釜

箱根を越える人足、旅人のために、無料で茶や焚火を提供したのが接待茶屋です。箱根西坂では、文政7年(1824)、現在の施行平の地に、江戸呉服町の豪商加勢屋與兵衛によって始められました。これは30年間続きますが、資金の運用難から一度閉じられます。

次いで明治12年(1879)千葉県八石性理教会により接待所が再興され、教会が衰退すると鈴木利喜三郎が引き継ぎ、昭和45年(1970)店が閉じられるまで鈴木家により、茶の奉仕が続けられました。

写真は鈴木家に伝わる接待茶屋で使われた茶釜です。からかね製の重厚なもので、明治12年八石性理教会が東京で鑄造させたものです。90年間休むことなく、この茶釜で湯がわかされ、その茶で旅人は疲れをいやしました。



▲企画展図録(1冊1,100円で販売中)

## 企画展 開催のお知らせ

## 「農兵節と平井源太郎」

「富士の白雪や ノーエ、富士の白雪や  
ノーエ、富士の サイサイ 白雪や 朝日で  
溶ける。(以下略)」

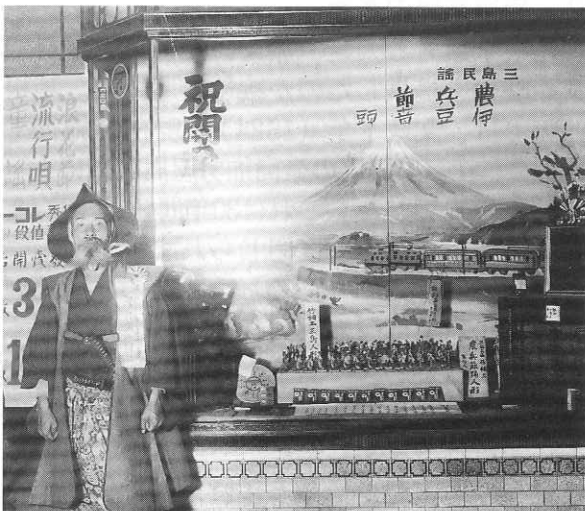
ご存知、お馴染みの「農兵節」の一節です。  
昭和の初めのころ、一人の男が、奇抜なスタ  
イルでこの唄と箱根の大根を大々的に世に売  
り出しました。男の名は平井源太郎と言いま  
した。以来、「農兵節」は三島を代表する民  
謡として知られ、多くの人々に親しまれ、唄  
われてきました。

企画展「農兵節と平井源太郎」では、この  
唄と、この唄を世に売り出すことに奔走し、  
ふるさとを愛して止まなかった一人の人物の  
功績を展示いたします。

平井源太郎、またの名を「源水」と称して  
いました。彼について、現代風に表現すれば  
「マチ興しの先駆者」とでも呼べるでしょ  
うか。いろいろな伝説が残っています。

「一体、彼は何者であったのか」という問い  
かけをして、平井源太郎の実像を探ります。

また、昔から三島の民謡としてきた「農兵  
節」ですが、「その唄のルーツは、曲のルー  
ツは、歌詞に隠されたほうとうの意味は」等々  
の疑問にも迫ります。



▲農兵踊りの元祖 平井源太郎

## 企画展概要案内

テーマ

## 「農兵節と平井源太郎」

～マチ興しにかけた情熱～

会場

三島市郷土館 1F 展示室

三島駅前南口 楽寿園内

会期

平成9年3月16日～5月11日

休館日・月曜、但し月曜祝日の時翌日

12月27日～1月2日

主催

三島市教育委員会

(三島市郷土館)



▲昭和初期の農兵踊り

郷土館だより No.56

平成8年12月15日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館

住所 〒411三島市一番町19-3 楽寿園内

TEL 0559-71-8228

FAX 0559-81-3730

発行 三島市教育委員会